

平成23年度国際交流センターの活動紹介

伴 美喜子

(受領日：2012年4月25日)

高知工科大学 国際交流センター
780-8502 高知県香美市土佐山田町宮の口185

E-mail:ban.mikiko@kochi-tech.ac.jp

要約：平成23年度の国際交流センターの活動の中から、①学生の海外研修、②国際シンポジウムISFTの開催、③国際教育フェア等への参加を通じたアジア地域のネットワーキングについて報告する。

I. はじめに

高知工科大学（KUT）国際交流センター（IRC）は2003年の博士後期課程特待生制度（SSP）の創設に伴い開設された。当初は同プログラムへの外国人留学生のリクルート、受入れを主たる業務としていたが、2006年に1期生が卒業してからは、そのフォローアップが加わり、また近年は日本人学生の海外派遣も重要な業務として位置づけられるようになった。本稿では、試行錯誤を続けながら進化する学生の海外研修、SSP卒業生のフォローアップ事業として位置づけられた国際シンポジウム—フロンティア・テクノロジー・シンポジウム（ISFT）の本学での開催、及び国際教育フェア等への参加を通じて行われたアジア地域のネットワーキングの3つの活動について報告する。

II. 学生の海外研修

1. KUTの海外研修プログラム

IRCでは2006年より学生の海外研修を企画・実施している。2006年は第1回タイ研修、2007年は第1回中国研修、2008年は第2回タイ研修を実施したが、何れも希望者が経費を個人負担（大学の補助あり）で参加するもので、応募者は必ずしも多くはなかった。

2009年4月に本学が私立大学法人から公立大学法人に移行したのを期に、学生の海外研修を発展・充実させる目的で予算措置がとられ、佐久間健人学長の御指導の下、本格的な取り組みが開始された。海外研修の基本方針が以下の通り明文化され、英語でのコミュニケーション力の向上を主目的としてTOEICの成績上位者を選考し、大学が経費を負担して学生をヨーロッパに派遣する、新たな形の海外研修

が始まったのである。

高知工科大学 学生海外研修の基本方針

① 目的：

学業・人物ともに優秀な有望学生に対し、海外の大学との専門領域の交流、学生生活についての交流・意見交換を通じて、将来の国際的活躍の動機づけと国際感覚・知識・見識の醸成を図り、同時に研究・教育の両面で大学間国際連携の基礎を形成・強化する。

② 研修内容：

1. 工学・経営学などの専門領域の研究室訪問と交流・懇談
2. 相互の大学教員による相手大学学生向け授業
3. 大学間の学生交流
4. 大学間の交流・連携強化

平成21年度、2009年9月に英国とスペインで実施された第1回ヨーロッパ研修には学生15名（修士7名、学部生8名）、教員5名、職員5名が参加し、画期的な事業となった¹⁾。

平成22年度には第2回ヨーロッパ研修（英国、ドイツ）の他、大学院生の中国研修（ハルビン）が実現した²⁾。対象/目的別に海外研修を複数企画する形で、本事業の進化が図られたのである。

平成23年度は更に発展させ、第3回ヨーロッパ研修に加え、初めてのスポーツ交流—中国卓球研修が実現した。中国卓球研修については濱田美穂教授の報告に譲ることとし、本稿では第3回となったヨーロッパ研修—英国研修を中心に報告する。

2. 第3回ヨーロッパ研修—英国研修

2.1. 概要

前回、前々回のヨーロッパ研修が学生の英語力向上とともに、複数の国、都市を訪問し、ヨーロッパの文化と歴史に直接触れることを通じ、教養を高めることの意義が重視されたのに対し、今回の特徴は英語のコミュニケーション力の向上により大きなウェイトを置いたことである。そのため、訪問先はウェールズのグラモーガン大学1か所に絞った。前回は訪問した同大学の外国人向け英語導入教育が、ユニーク且つ効果的であるとの判断から、同大学に10日間の研修プログラムの企画を依頼し、研修費用を支払って、実施を「委託」する形をとった。

実施期間は2011年9月8日から18日まで、参加者は学部学生11名（システム工学群6名、情報学群1名、理工学群1名、マネジメント学部3名）、引率教員2名（一部参加）、職員3名であった。



写真1 グラモーガン大学における事前打合せ

2.2. 研修先としてのウェールズ

海外研修を実施するにあたり、最も重要且つ困難なのは、訪問先を確保することである。2009年の第1回ヨーロッパ研修の折には、唯一バレンシア工科大学と実質的な交流があり、躊躇なく受入れを打診した。直前に同大学の国際交流担当職員が本学を訪問しており、人物もわかっていたので、頼みやすく、話はスムーズに運んだ。カウンターパートとの信頼関係は重要である。

「英語」研修の側面が強いことから、もう1か所は、英語圏が望まれたが、交流の実績はなかった。そんな中、面識のあったウェールズ議会政府東京事務所の小堀洋子氏に助言と協力を求めた。第1回ヨーロッパ研修のスウォンジー大学訪問、第2回、3回のグラモーガン大学訪問が成功裏に終わったのは、同事務所の協力のお蔭である。

この間、時々同事務所を訪れ、報告を行ってきたが、先日以下のようなメールをもらった。「ネットワーキングは、一朝一夕で築けるものではありませんが、(中略)種から苗へ、大切に育てていただいたご縁が少しずつ花開き、私達も心から感謝しております。」と本学とウェールズの大学との交流の発展の喜びを分かち合うことができた。

ウェールズはグレート・ブリテン島及び北アイルランド連合王国を構成する地域(州ではない)である。学生はEnglandがイギリスではなく、Englandにはウェールズが含まれないことを学ぶことから始めなければならない。独自の言語も国旗もある。

ウェールズと日本は1980年代から特別の関係にある。1970年代にソニーがチャールズ皇太子からの誘いを受けて、ウェールズに進出したのを皮切りに、多くの日系企業が進出し、1980年代のピーク時には50社もあったという。ウェールズの人々は元々フレンドリーであるが、地域と日系企業の交流を通じ、英国の他の地域よりも親日的であるのかもしれない。

このような土壌が初めて外国に触れる学生たちに、緊張を和らげる絶好の環境を提供してくれたと思われる。

2.3. 参加者の募集・選考

5月末に募集を開始し、7月8日に募集を締め切ったところ、30人の応募があった。TOEICのスコアを中心に書類審査を行い、選ばれた15名に対しIRC教員による15分間の面接を行って、参加者を決定した。結果は学部1年が5名、2年が4名、3年生が2名の計11名が合格となった。平均年齢が若いことが、今回の特徴であった。なお、今回の面接では直前にテーマを与え、5分以内のプレゼンをさせるなどの工夫を行った。

2.4. 研修内容

オリエンテーションは、8月9日、8月25日、及び9月5日の3回行った。スケジュールや手続き関係のこと以外に、佐久間学長や八田章光国際交流センター長の研修の目的や意義に関する講話、中村直人教授による英国に関するレクチャー、学生のプレゼンなどが特に役立ったと思う。学生たちは各自テーマを選んで5分程度の発表を行い、研修に向けて、助走を始めたのである。テーマは英国の地理・気候、歴史、文化、王室、建築、食文化、産業革命、ウェールズについて及び日本の文化についてなどであった。



写真2, 3 研修の中で学生間の交流が一番楽しかった!



写真4, 5 番外でストーンヘンジも見学できた!

9月8日、学生11名は引率教員の野中弘二教授及び筆者（両者は後半、福留国際交流部長と交代）、並びに入試・広報部の宮林職員、研究支援部の藤波職員と共に、高知空港を出発し、同日午後英国のヒースロー空港に到着した。そして、グラモーガン大学が手配してくれたバスに乗って、期待で胸を膨らませながらウェールズの首都カーディフに向かった。

翌日から始まったグラモーガン大学での研修内容は下記のとおりである。

- | | | |
|-------|----|---|
| 9月8日 | 午前 | 高知発、成田経由ロンドン着 |
| 9月9日 | 午前 | オリエンテーション、キャンパスツアー
実力チェック（書く、話す）
ウェルカムランチ |
| | 午後 | 工学部、マネジメント学部見学
ウェールズ、グラモーガン大学クイズ |
| 9月10日 | 終日 | 小旅行（バース、ストーンヘンジ） |
| 9月11日 | 終日 | 自由行動（カーディフ周辺） |
| 9月12日 | 午前 | グラモーガン大学生と交流しながら英語コミュニケーションを学ぶ |
| | 午後 | エンジニアのための英語 |
| 9月13日 | 午前 | BBCニュースを聞く
課題‘Super-invention’についての導入 |
| | 午後 | St.Fagans 民俗博物館見学 |
| 9月14日 | 午前 | 英国の文化 |
| | 午後 | ‘Super-invention’についての発表 |
| 9月15日 | 午前 | ライティング |
| | 午後 | ディスカッション&分析
修了式
ロンドンへ移動 |
| 9月16日 | 終日 | ロンドン見学 |
| 9月17日 | 午前 | ロンドン見学 |
| | 午後 | ロンドン発 |
| 9月18日 | 午後 | 高知帰着 |

2.5. 研修の成果

帰国後報告書を提出させ、2011年11月8日には理事長、学長にもご出席いただき、中国卓球研修と共同の報告会を開催した。学生たちは、研修中ディシプリンのある団体行動をとり、大きなハプニングもなかった。みな充実感を感じ、個人的にはそれぞれ

英語力を向上させ、人間として成長したと言える。また、帰国後、留学生の日本語の授業に協力したいと申し出るなど、積極的な面もみせた。

しかし、大学が実施する海外研修プログラムとしての視点に立って評価すると、全員が学部生で社会的経験がまだ未成熟であったため、英語での表現内容も文化的背景の吸収力もまだ十分ではなかった点で課題があると感じた。

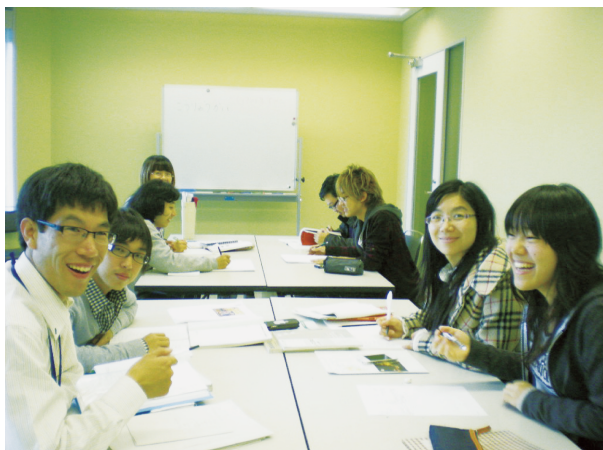


写真6 帰国後：グラモーガン大学での経験を活かして、留学生に日本語を教える取り組み

2.6. 研修を通じた大学間の交流・連携強化

学生を中心とした訪問団の派遣は、大学間の交流を深化、発展させる上で、大きな役割を果たすことをこの3年間で実感した。ヨーロッパ研修は、従来アジアを中心としていた本学の国際交流の対象地域を拡大することに貢献した。

グラモーガン大学滞在中に、野中弘二教授と筆者が、Julie Lydon学長を訪ね、交流協定を締結した。また、リサーチアドバイザーのDr.Owain Kertonと意見交換し、両校が交流可能な分野の情報を交換した。

2012年3月に2回の研修プログラムの企画・実施責任者であったHelen Connies-Laing氏が、初めての中国訪問の帰路、高知に立ち寄ってくれた。平成24年度のグラモーガン大学での研修は見送られたばかりだったが（後述）、中・長期の交流を見据えた意見交換がなされた。

Helen氏にとっては初めての「極東」訪問であったが、中国のある地方都市では白人であるというだけで珍しがられ、箸を使えないことで笑われたという。日本（成田、羽田空港と高知のみ）では、行く先々で異なるトイレの最新装置に感動したと述べていた。

このようにして、大学間や教職員の相互理解や交

流が展開していくことも大きな成果である。



写真7 交流協定締結（前列右Lydon学長、後列左Alun国際部長）



写真8 佐久間学長を表敬訪問するHelen先生

3. 総括

以上述べてきたように平成23年度英国研修は一定の成果を修めたものの、3回のヨーロッパ研修を総括した時、多大な費用を必要とするにもかかわらず、本学の学生たちの英語力及び文化吸収力が研修内容を十分に咀嚼、活かすレベルに達しておらず、研修前、研修後の教育（特に英語）システム全体を抜本的に見直す時期に来ているとの判断から、当面は学部生を中心としたヨーロッパ研修を一段落させることとなった。従来、IRCを中心として企画・実施してきた海外研修は今後、共通教育などとも連携を取り、大学全体で考える時がきたのである。

また、このような大学丸抱えの海外研修の他、近年各国で増加している短期受け入れプログラム（サマープログラムなど）への参加を呼びかけ、学生の自主性を重んじるとともに、研修先を多様化することも

新たな課題であろう。

アジアの活力が勢いを増し、グローバル化が加速する中、逆に日本では若者が内向き志向に陥っていることが憂慮されている。若い時に、世界に飛び出し、他流試合に臨み、自分たちの置かれている状況を知るチャンスを学生に与えることは、今後ますます重要な課題となるであろう。今後も暫くは試行錯誤が続くであろうが、学生の海外研修事業は更に充実させていかなければならない。

Ⅲ. 国際シンポジウムISFTの開催

1. 経緯

高知工科大学（KUT）は2003年より本学の研究スタッフとなり得る優秀な人材を海外から集めることを目的として「博士後期課程特待生制度」（通称SSP）を設け、これまで本プログラムにより135名の留学生を受け入れてきた。その7割が中国からであり、2番目に多いのはタイからである。既に80名が博士号を取得し、母国や日本を中心に世界各地で活躍している。

第1期生が修了した2006年に中国及びタイに高知工科大学同窓会支部が設立された。中国支部は単なる友好クラブに終わるのではなく、実質的な研究交流を通じ同窓生が引き続き切磋琢磨していくことを願って、シンポジウムの開催を計画した。

卒業生たちの努力が実り、2007年8月、第1回のシンポジウムが「International Symposium on Frontier Technology (ISFT)」と題して、瀋陽工業大学で開催された。本学との交流協定校である、瀋陽工業大学、瀋陽薬科大学、東北大学などの協力も得て実施された。

続いて2009年9月に第2回ISFTがハルビンのハルビン師範大学で、交流協定締結校である同大学等の協力を得て開催された。

今回は是非母校で、との元留学生たちの強い要望があり、第3回ISFTは本学で開催することになった。今回はタイ支部の協力も得、他の国の修了生（15か国）にも呼びかけてRe-unionを兼ねたものとし、重要な留学生フォローアップ事業として位置付けられた。

2. 概要

2011年7月29日、30日の両日、本学、本学同窓会中国支部、同タイ支部共催による第3回ISFTが開催された。

協賛は（財）総合工学振興会、（社）近畿化学協会、（社）精密工学会、（社）日本設計工学会四国支

部、（社）応用物理学会中国四国支部、（社）電子情報通信学会中国四国支部。後援は国立大学法人高知大学、公立大学法人高知県立大学、（公財）高知県国際交流協会、NPO法人高知県日中友好協会、香美市国際交流協会、南国市国際交流協会に依頼した。

参加者は卒業生24名（出身国は中国、タイ、バングラデシュ、パキスタン）、SSP在学学生8名を含め総勢104名であった。



タイ・バンコクから



中国・ハルビンから

写真9, 10 お帰りなさい!

（独）科学技術振興機構研究倫理監査室主幹の御園生誠氏、北海道大学大学院情報科学研究科金子俊一教授、本学那須清吾教授及び甲斐芳郎教授による基調講演の他、情報通信工学、メカトロニクス・システム工学、環境システム工学、電子・光システム工学、社会基盤工学、起業工学の6つの分野の分科会が設けられ、32名の研究発表を通じ、国際的な連携、研究交流が図られた。

卒業生たちは、懇親会や公式プログラムの合間を縫って、元指導教員への近況報告や意見交換を行い、

同窓会本部主催による昼食会や翌日実施された栲原町風力発電施設等の見学ツアーを通じ、先輩や後輩たちと交流し、仲間と旧交を温めた。また時間のゆとりのある者は、留学中お世話になった地域の方々を訪ねたようだ。



母校キャンパスの木陰で先輩・後輩と



分科会：教員も在校生も熱心に聞き入る



中国同窓会支部総会も開催

写真11, 12, 13 ISFT at KUT

3. 卒業生との絆

このように卒業生のフォローアップ事業としての第3回IFSTが成功裏に終わったのは、本学と留学生たち（後の卒業生）との間の長い間の交流と努力の結実であると言えよう。

特記したいのはシンポジウム終了後、同窓会中国支部による植樹式が行われたことである。中国支部のメンバーは「SSP制度」により高知工科大学に留学できたことに感謝し、また今後の日中交流の発展を祈念して、キャンパスのグラウンドに桜の木を植樹してくれた。灼熱の太陽の下で行われたこの行事には、SSPプログラムの創設者岡村甫理事長、佐久間健人学長、西郷和彦副学長も出席され、卒業生たちも直接謝意を伝えられたことを喜んだに違いない。

この他にも中国支部は東日本大震災の見舞金を集め、12万円を安藤忠雄氏らが立ち上げた、遺児育英資金会の「桃・柿育英会」に寄付している。

留学生たちが、日本と海外諸国の懸け橋となってくれることを強く実感した事業であった。

4. 卒業生フォローアップ事業

ISFT開催への協力の他、本学では様々なフォローアップ事業を実施している。2010年からは修了生を2週間から1か月招聘する「帰国SSP留学生のための研究指導短期受入れ」プログラム、2011年からは「高知工科大学帰国SSP留学生研究助成」プログラムなどが始まった。

また、最近では教授や准教授に昇格した修了生たちが教え子を送り込んでくるケースも増え、高知工科大学への2世代留学が実現している。

高知工科大学は一人一人の留学生の面倒見がよく、卒業生たちとの絆を大切にしている大学であると自負している。



写真14 同窓会中国支部植樹式：KUTありがとう！

IV. アジア地域におけるネットワーキング

筆者はこれまで国際交流センター事務部門の責任者であったが、平成23年度より国際交流センター専任の特任教授となり、国際交流センター長の代行として海外営業を中心とした業務に従事することとなった。その立場から、海外、特にアジアの実情に直接触れる機会を与えられ、今後の地域戦略策定に資することができた。その体験を通じて、見聞したこと、感じたことを報告したい。

1. 中国の大学の創立記念式典出席

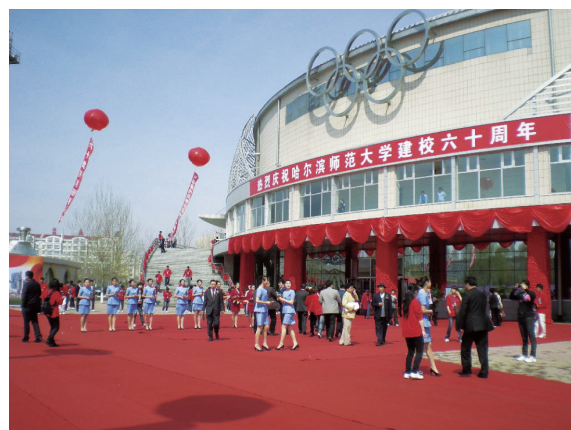
平成23年度、交流協定校であるハルビン師範大学の創立60周年記念式典、黒龍江大学の創立70周年記念式典、及び交流のある厦門理工学院の創立30周年記念式典に招かれ、出席した。何れも何万人もの学生を有する規模の大きな大学である。本学は歴史も浅く、規模の小さな大学であるが、ユニークな大学であるとの評価を得、古い友人として温かい歓迎を受けた。中国は歴史を大切にす国柄であることを式典及び記念行事を通じて実感し、また、多くの海外関係者を招待し、丁重に遇する姿に中国の国際性とホスピタリティーを見た。

2011年5月7、8日に出席したハルビン師範大学（黒龍江省ハルビン）創立60周年記念式典の例を報告する。

中国東北地域は、歴史的にも日本と縁が深いところだが、最近ロシアや朝鮮半島と急接近している。学生数4万人の同大学のキャンパス中に真っ赤な横断幕やアドバルーンが掲げられ、祝賀ムードに満ちていた。まるで人民大会堂に迷い込んだ様な式典会場。自らが司会をする党委書記の姿がスクリーンに大写しされ、迫力ある声が会場に響き亘った。急成長する国の威力が伝わってきた。

海外からは日本、韓国、ロシア、ベトナム、ポーランド、オーストラリアの6か国より計20数名が参加。日本からは本学の他、北海道教育大学、弘前大学、明星大学が出席した。何千人もの観衆の前で、海外からの来賓を代表して北海道教育大学の本間学長が挨拶をした。23年前に北海道と黒龍江省が姉妹関係を締結したことがきっかけで両校の交流が始まり、これまでに延80人の学生が交換留学で相互訪問をしているという。日本が海外からの来賓を代表したことは、地域交流が深まっていく中で、依然として日本との交流を重視している証しだろうか。

夜の演芸大会や花火大会まで、1日中続いた行事の合間に参加者と名刺交換をした。表はロシア語、裏は中国語のものもらった時はハッとした。英語



キャンパス中に真っ赤な横断幕やアドバルーン



まるで人民大会堂に迷い込んだよう…



スクリーンに大写しされた王選章学長

写真15, 16, 17 ハルビン師範大学大学の創立60周年記念式典

ぬきの国際交流！ 同大学の国際交流部には、英語以外にも日本語、韓国語、ロシア語の通訳が出来るスタッフがいて、歓迎夕食会等では多言語でコミュニケーションがとられた。国際語＝英語ではない舞台上に居合わせ、日本ではわからない、「もう1つの」グローバル化を見た思いがした。同大学は昨年



写真18 海外からの来賓（新校舎の前で）



写真19 付軍寵党委書記（左）主催歓迎夕食会

は北京外国語学院に次いで2番目にポーランド語教育を開始しているようだ。「国際交流戦略」が「一律」でないことについて考えさせられた。

2. 韓国KAIE年次大会参加

本学のSSP広報上の地域戦略を改めて考え始めたとき、本学に近隣の韓国や台湾からの留学生がいないことは問題だと感じた。振り返ってみれば、これらの地域に向けての本格的な広報を怠ってきたのだから、当然のことである。重点地域である中国、タイに加え、今年は韓国、台湾を開拓すべしと考えた。

そんな折、特定非営利活動法人JAFSA（国際教育交流協議会）が2012年2月1－3日に韓国慶州（Gyeongju）で開催されるKAIE（韓国国際教育者協会）の年次大会に訪問団を派遣することを知り、JAFSAのご厚意によりオブザーバーとして同行させてもらった。

今年のテーマは「Integrated Approaches to International Education」、会員校100校から200人を超える参加者があった。使用言語がほとんど韓国語であったため、活発な議論の詳細はわからなかつ

たが、教育科学技術部（日本の文科省に当たる）の担当者が「留学生受け入れの質的保証の取り組み」と題して、評価指標、募集方法、アカデミックサポートや生活サポートなどについて発表すると、質問が絶えなかったのが印象的であった。韓国の高等教育の実情は日本と同じで、少子化等の影響により2015年には50校位廃校となる見通しであるとの噂も聞いた。政府は昨年優良校10校を表彰するとともに、ブラックリストも公表したという。

日本のJAFSAが設立されたのは1968年、韓国のKAIEはJAFSAの経験から多くを学び、1998年に設立された。爾来両団体の緊密な交流は続いているが、会場の眩きによれば、今やKAIEの方が遥かに勢いがあり、活力に満ちているとのことであった。例が不適切かもしれないが、公式の夕食会の後、役員会のメンバー（30代が中心）がホテルの一室を借り切って、届いたばかりの冷凍ダンボールから、産地直送の生のよいカニやクジラを取り出してテーブル一杯に広げ、マッコリで乾杯を繰り返す、ワイルドな2次会からも彼らの団結力、溢れるエネルギーを感じた。



写真20 覚書を締結するKAIE（左）とJAFSA（右）

実は大会の前日KAIEのLee Seunghwan（李承煥）会長（嶺南大学校、Yeungnam University）のご厚意で、嶺南大学校や啓明大学校（Keimyung University）の視察、韓国第4の都市、大邱（Daegu）市内の見学が実現したのだが、「韓国は頑張っているのですね」と感想を漏らすと、「日本をモデルにしてきたのですよ」との返事が返ってきた。その日本も最近では意思決定が遅すぎると感じている、とのこと。大学の国際交流専門家として関西外国語大学の山本甫氏を尊敬しており、日本の大学30校と協定を結んでいるが、これまで東京は避けて、地方を重視してきたとのことであった。英語はパーフェ



写真21 Lee Seunghwan KAIE会長（中央）

クト、日本語も少し、実行力とホスピタリティーに溢れる、数え年46歳の会長である。

海外からは英国や米国からの招待講演者のほか、団体としてはJAFSA、台湾からFICHET（財団法人高等教育国際合作基金会）が招待されていた。FICHETも勢いがあり、4人のメンバーは皆フレンドリーだったので、台湾とのネットワークづくりもできた。これは予想外の収穫だった。余談だが本学在籍中の楊秋興氏が台湾行政院政務委員に就任したニュースも彼らから聞き、台湾の新聞に「高知工科大学」の名が載っていたことも教えてもらった。

出張目的の1つであったSSP広報であるが、会場でアナウンスしてもらったり、帰国後十数校に広報協力依頼を行ったが、直後の募集で1校2件の申請があったのみである。すぐに効果を期待することはできないので、引続き今後も、大会で知り合った人たちと連絡を取り合っていく、将来韓国からもSSP生が来るルートを築いていきたい。

3. タイAPAIE年次大会参加

2月のKAIE大会出席がネットワークづくりの上で有意義だったので、JAFSAの高田事務局長の勧めもあり、2012年4月4-6日バンコクのマヒドン大（Mahidol University）で開催されたAPAIE年次大会に参加した。

APAIE（Asia-Pacific Association for International Education）は2004年に韓国のソウルにおいて、アジア太平洋地域の13の大学により結成された。NAFSA（アメリカを拠点とした国際教育交流団体）やEAIE（欧州を中心した国際教育交流団体）とは別に、「アジア太平洋の視点で」、国際教育交流に関する情報・意見交換の出来るフォーラムの必要性を強く感じたLee Doo-Hee高麗大学校（Korea University）副学長のイニシアチブで、自ら

各国を回って説得して実現したという。因みに日本からは早稲田大学が結成当時のグループに入っており、同大学は2008年大会の開催会場となっている。

毎年各国持ち回りで大会が開催されているが、今回は第7回目で、プログラムは基調講演、学長ラウンドテーブル、分科会、大学別の展示などで構成された。会場は、医学のみならず、総合大学としてもタイのトップを争うマヒドン大学。テーマは「University Social Responsibility for Benefit of Mankind」。創立者のマヒドン王子の哲学である「True success is not in the learning but in the application to the benefit of mankind」に呼応するものであった。



学長ラウンドテーブル参加者

写真22, 23 APAIE年次大会

まず、驚いたのは参加者の多さである。地域のフォーラムというイメージで参加したが、大学等の国際交流担当者を中心に登録者は39か国700人に及んだ。域内はもちろん、両米大陸（広義では域内であるが）やヨーロッパからの参加者が半数を超えていた。域外の関係者が如何にアジア太平洋地域の発展に関心

を抱いているかの表れであろう。

開催校となったマヒドン大学は、昨年の大洪水の被害を乗り越え、立派に、そして粋な計らいと溢れるホスピタリティーで参加者を迎えた。オプションのマヒドン大学の音楽学院の見学ツアーなども、タイの大学の挑戦と発展を知る良い機会となった。

入学式の時期だったこともあってか、日本からの参加者は多くはなかった。韓国と台湾が「国/地域」として纏まっていて、頑張っているとの印象を受けた。中国からはまだ参加が少なく、人民大学、吉林大学など数校に留まった。インド、フィリピンなどの存在感もまだ薄かった。第8回（2013年3月11-14日）は香港で開催されるが、主催者となる香港中文大学は、中国からも多くの大学の参加を呼び掛けるので、是非来年も会いましょうと、熱烈なエールを送っていた。

国際教育交流を考える上で、またネットワークづくりのためにも、APAIEは有益な場であり、今後も本学からの参加が望まれる。

V. おわりに

以上平成23年度の国際交流センターの活動の中から3つを選んで紹介した。2003年に開設された国際交流センターは来年10周年を迎える。この10年のアジアの発展、世界の変化は目まぐるしい。世界、特にアジアの動きを注視し、他国からも学びつつ、高知工科大学の国際交流センターの活動が時代に相応しい形で進化することが強く望まれていると思う。

参考文献

- (1) 伴美喜子、“高知工科大学紀要第7巻「高知工科大学国際交流センターの活動—留学生受入れから学生の海外派遣・研修まで—」” P.257-260, 2010.
- (2) 八田章光、“高知工科大学紀要第8巻「中国研修及びヨーロッパ研修—平成22年度学生海外研修報告—」” P.215-225, 2011.

Activities of the International Relations Center in 2011 Fiscal Year

BAN Mikiko

(Received: April 25th, 2012)

International Relations Center, Kochi University of Technology
185 Miyanokuchi, Tosayamada, Kami City, Kochi 782-8502, JAPAN

Abstract: In this report, following three major activities of the International Relations Center in 2011 fiscal year are reported.

- ① The 3rd Student Study Tour to Europe (English Summer School at University of Glamorgan)
- ② The 3rd International Symposium on Frontier Technology (ISFT) which was held at KUT as a re-union program for the overseas graduates
- ③ Networking activities in the region (China, Korea, APAIE)